J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 7, No. 1（2023）71 ～ 83

式亭三馬『浮世風呂』に見られる オノマトペの特徴

中　里　理　子

A Study on Onomatopoeia in Shikitei Samba's "Ukiyoburo"

Michiko NAKAZATO

要　　旨

『浮世風呂』に用いられたオノマトペを、地の文、ト書き、セリフの部分ごとに、擬音語・擬態語に分けて特徴を見た。地の文は擬音語が多く、市中の様子や人物をイメージさせる音、銭湯らしい音が見られる。ト書きは、擬音語では地の文以上に銭湯らしい音が用いられ、擬態語は人物の体格や表情、歩き方を表すオノマトペや、銭湯に集まる人々の姿、心理・性格を表すオノマトペが見られる。セリフのオノマトペは総数の約八割を占める。擬音語の65％が笑い声のオノマトペであり、42種の語で人物ごとに表現し分けている。擬音語は舌打ちや溜息、げっぷなども細かく表され、会話の音声を活写している。三味線や馬の嘶きなどの口真似が多いことも特徴的である。セリフの擬態語は、多用された語は少なく様々な語が見られた。人物の外見、態度、話し方、心情や感覚を表すオノマトペが多く、また、話に勢いをつけるオノマトペや素早さを表すオノマトペが見られた。

はじめに

筆者は近世のオノマトペ（擬音語・擬態語）の様相を探るために、文芸ジャンルごとにオノマトペの特徴を見ることを目指している。近世の文芸作品の中でも、滑稽本は庶民的な本であり[1)]、口語的な特徴を持つオノマトペが多用されていると考えられる。本稿で対象とする『浮世風呂』は、『日本古典文学大辞典』の解説に「主要な登場人物の会話の応酬を中心にまとまった世界が描かれ」「江戸俗語を描写した作品として注目される」とあり、特に会話部分には当時のオノマトペが豊富に見られるのではないかと思われる。そこで本稿では、地の文、人物の動作などを描いたト書き、セリフの三つの部分に分けてオノマトペを抽出し、それぞれの部分に見られるオノマトペの特徴を整理する。

『浮世風呂』のオノマトペを対象とした先行研究に、酒井知子（2019）がある。酒井は、抽出したオノマトペについて、形態と意味の面から『日葡辞書』『安愚楽鍋』と共通している語・異なる語を整理している。本稿では、本作品にどのようなオノマトペが用いられているかについて整理する目的で、地の文、

佐賀大学　教育学部　学校教育講座

ト書き、セリフの部分ごとに、擬音語・擬態語に分けてオノマトペの意味と描写対象を分析し、特徴を見出す。調査対象としたのは新日本古典文学大系本である[2)]。

抽出するオノマトペは、近世のオノマトペも掲載している『日本語オノマトペ辞典』を参照し、掲載されていない語については『古語大辞典』『角川古語大辞典』を参照して、個別に検討する[3)]。「ふは／＼（鶏卵料理のこと）」「うぽつぽ（うかうかしていること）」のような名詞形は取らないが、「ぽつとりもの」のように形容語となっている場合は取った。ただし、「ぐるり落（髪型の名前）」のように固有の名称となった語は取らない。また、名詞形の「ぞり／＼（頭を剃る事）」が副詞として擬音語となる場合は取るなど、同じ語でも語形や用法によって判断が異なる語もある。「イヒヽイヒヽ、イヒヽヽヽヽヽ」のように、読点によって区切れていても一続きと思われる語は一語と扱った。長いものでは「テコテントン、てこ／＼、てん／＼、つん、ぽん／＼（三味線の口真似）」のような例がある。なお、「ふと」「ずつと」のような１・２拍の語は引用の「と」まで取った。繰り返し記号は便宜的に「／＼」と表す。表記は、用例すべてがひらがな・カタカナの場合はその表記にしたがうが、「とん／＼」「トン／＼」のように表記が異なる語も同じ語とみなし、どちらかの表記に統一した。分析は主に和語のオノマトペを対象とするため、「べん／＼と（便々と）」のような漢語由来の語については、和語のオノマトペと区別して検討する。

1　『浮世風呂』のオノマトペ総数

抽出した和語のオノマトペは、延べ語数で541語である。内訳は、大意・序文に７語、地の文に24語、ト書きに81語、セリフに429語である。「大意･序文」は他の部分との文体差が大きいため、今回は「大意･序文」の７語「ざつと・さらり・ちよいと・莞爾（にこり）・ぶく／＼・ほと／＼・まだら／＼」は分析対象としない。また、挿絵の解説にも４語「だゝぶだぶ／＼・ぷん／＼・ゆるり・よろ／＼」が見られたが、これについても分析対象とはしない。

擬音語と擬態語を区別して「地の文」「ト書き」「セリフ」の延べ語数を整理する[4)] と以下のようになる。

［地の文］　擬音語16語　　擬態語８語
［ト書き］　擬音語16語　　擬態語65語
［セリフ］　擬音語219語　擬態語210語

地の文では擬音語のほうが多く、ト書きでは擬態語のほうがが多くみられる。セリフには擬音語・擬態語ともに多くのオノマトペが見られるが、擬音語は笑い声を表すオノマトペが143語あるため多くなっており、笑い声を除くと擬態語のほうが多くなる。以下、地の文、ト書き、セリフのオノマトペの特徴を見ていく。

2　地の文のオノマトペ

作品に占める地の文の割合が少ないことに伴って、オノマトペの総数も少ない。その中では、前節で見たように擬態語より擬音語のほうが多く見られた。以下に擬音語・擬態語を示す。括弧内には、オノマトペが修飾する語や状況を示すが、被修飾語がない場合は意味内容を示した。数字は複数例ある場合の用例数を表す（以下同じ）。

＜擬音語＞

カア／＼／＼／＼（あけがらす）　カチ／＼／＼（火打ち）　がや／＼（騒ぐ）　ぎやあ／＼（泣く）　ギリ／＼／＼／＼チヤン（自鳴鐘）　シイ引（小便の音）　チリリンチリリン（鈴）　チリリンチンリン／＼（鈴）　ててんつる（口三味線）　とん／＼（壁を叩く）　トン／＼／＼／＼２（板を叩く２）[5)]

ふゝふん（鼻へぬかす）　ポク／＼／＼／＼（木魚）　わわわん（犬）　わん／＼（犬）

＜擬態語＞

ぐるり（回る）　ざつと（一風呂）　しんめり（とする）　ぶう／＼（いう）　ぶる／＼（肩を震わす）　ぷん／＼（匂う）　ほゝほん（あごで転がす）　よろ／＼（してゐる）

擬音語には、カラスや犬の鳴き声、火打ちの音など、市中の様子を表す語が見られる。また、木魚は僧侶の叩く音、鈴は比丘尼が鳴らす音で、少数例だが人物をイメージさせるための音が見られる。銭湯の場面らしい音としては、集まった人々を「ぎやあ／＼」「がや／＼」と表すほか、壁や板を叩く「とん／＼」という擬音語が見られる。

擬態語に関しては、いずれのオノマトペも銭湯に集まってくる人々を描写する語である点が特徴的である。

3　ト書きのオノマトペ

ト書きは、作品に占める割合が地の文よりも多く、オノマトペも多数見られる。前節と同様に擬音語と擬態語を指示内容とともに示す。（括弧内の「＝」は筆者が意味を付け加えたものである。）

＜擬音語＞

がた／＼／＼（下駄をはく）　かつちり（＝頭を打つ）　キイ／＼（言う）　ざつぷり２（水や湯をかける音２）　スウ／＼（言う＝息が漏れる）　どや／＼（人来る）　トン（叩く音）　トン／＼（叩く）　トン／＼／＼／＼（はめを叩く）　ばた／＼（叩きまわす）　ぴつしやり（背中をたたく）　ふつと（吹きかける）　ワア／＼（泣く）　ワアゝゝゝワア引（泣く）　わつと（泣く）

＜擬態語＞

うそ／＼（見回す）　がつくり（首を横に曲げる）　きよろ／＼３（突つ立つ・見る・見回す）　ぎろ／＼（目）　ぐいと（すべる）　ぐつと（いきばる）　ぐる／＼３（巻く２･頭を回す）　ぐんにやり（となる）　こそ／＼（上へあがる）　さつさと（行く）　さと（開く）　しかと（とらえる）　ずつと２（押す・入来る）　すつぽり（手拭いを巻く）　するり（すべる）　ずんぐり（する）　そつと３（取る・かたよせる･入来る）　だらり（手拭いをかける）　ちよいと（手拭いを乗せる）　ちよきり（＝きっちり）　つく／”＼２（見る２）　でつぷり（する）　てんつるてん（古浴衣）　どつさり２（仰向けに転ぶ２）　にこ／＼（する）　のろり／＼（湯をくむ）　はら／＼（する）　ぴか／＼（光）　びつくり８（する８）　ひよいと（飛び出す）　ひよろ／＼３（ひよろつく･梯子を下りる･する）　ひよろ／＼ひよろ／＼（＝操り人形の様）　ひらり（身にまとう）　ふつと（心づく）　ふら／＼（足）　ぶる／＼（手元を震わす）　べつたり２（胸に汁のあと・座す）　べろり２（舌を出す２）　ぽつ／＼（湯気をたてる）　ぽつとりもの２　むぐ／＼２（口を動かす２）　よたり／＼（する）　よろ／＼（する）

先に見たように、擬音語より擬態語のほうが、種類も数も多い。

擬音語では、銭湯の場面らしい音として、水や湯をかける「ざつぷり」、合図のために羽目板を叩く「トン」「トン／＼」「トン／＼／＼／＼」、下駄をはく「がた／＼／＼」などが見られる。

擬態語は人物の動作を示す例が多いが、中でも体格や表情、歩き方など人物の姿・外見を表す語が多い。体格を表す「ずんぐり」「でつぷり」、眼付を表す「ぎろ／＼」、舌を出す様子の「べろり」、手の様子を表す「ぶる／＼」、口元の様子を表す「むぐ／＼」、衣服の様子を表す「てんつるてん」、歩き方を表す「ひ

よろ／＼」「ひよろ／＼ひよろ／＼」「ふら／＼」「よたり／＼」「よろ／＼」、手拭いの持ち方を表す「すつぽり」「だらり」「ちよいと」が用いられ、銭湯に集まるさまざまな人物の姿がオノマトペでいきいきと描かれている。人物の心理や性格がうかがえる語には、落ち着かない様子の「うそ／＼」「きよろ／＼」、勢いの良い動作を表す「ぐつと」「ずつと」、素早い動作を表す「さつさと」「ひよいと」「ひらり」、密かに動く様子の「こそ／＼」「そつと」、意気消沈する「ぐんにやり」、愛想のよい「にこ／＼」、驚く様子の「びつくり」、心配する様子の「はら／＼」がある。見た目を表す擬態語で人物の姿をイメージさせ、心理や性格を表すオノマトペによって人物の心情をイメージさせている。以下にいくつか例を挙げる。

(1) 三十あまりの男ねまきのまゝ細おびにて、下まへ下りにきものをきて、（略）油で煮染たやうなる手ぬぐひを、いくぢなくだらりと肩にかけ、（前編）
(2) 七十ばかりのいんきよ、置づきん上子のそでなしばおり、十二三のでつちに、ゆかたをもたせてつゑにすがり、くちをむぐ／＼しながら（前編）
(3) かみがたすぢの女、ずんぐりとした風俗、いろ白にてくちびるあつく、目のふちは紅のぼかし、口べにくろびかりに濃くぬり、（二編）
(4) 西国の方からはじめて江戸へ出て銭湯の勝手をしらずきよろ／＼とつつ立てゐたりしが（前編）
(5) 三十くらゐの婦人、義太夫のけいこ所の女房とおぼしく（略）ふとざをの一の糸もて、紐につけたる、ぬかぶくろを口にくはへて、かけざをからゆかたをはづして、ひらりと身にまとひながら（三編）
(6) さいぜんのなまゑひ、せんのおけをそつと取て、かたわきへのけておきしが、又こんどのおけをも、そつとかたよせておく（前編）

『浮世風呂』では銭湯を舞台に多くの人物が登場するが、人物が登場するごとにその容姿、風体、しぐさなどの説明が細かくなされ、適宜オノマトペを使用することで登場人物のイメージを鮮明にしている。例（1）～（3）は、体格や表情、衣服の様子などを描く中でオノマトペが用いられている。例（4）は慣れない江戸で落ち着かない西国者の様子が、例（5）は男勝りで気風の良い義太夫の師匠の素早く浴衣をまとう様子がオノマトペを用いて描かれている。例（6）は、酔っ払いの男が二人の盲人（座頭）の汲んだ湯を悪ふざけで密かに隠す様子を「そつと」というオノマトペで表し、芝居を見ているような感覚になる。ト書きは、もともと演劇用語として用いられ、「台詞以外の演技・演出等の説明を記した部分」[6] である。滑稽本においても人物の外見、様子、動きを説明しており、オノマトペも効果的に使われている。

4　セリフのオノマトペ

セリフに見られたオノマトペは、抽出したオノマトペの延べ語数543語のうち、約八割の431語であり、作品で描かれるセリフの割合に比例している。延べ語数が多いため、セリフに見られた擬音語・擬態語と指示内容については稿末に一覧表を示した。

4．1　セリフに見られる擬音語の特徴

擬音語の中で目に付くのは、笑い声の多さ[7]、汚い音の描写、口真似である。まず、笑い声のオノマトペから見ていく。

＜笑い声の擬音語＞

アツハツハツハ、、、、、、　アツハ、、、、　アツハ、、、、ハ、、、、　アハ、、、10

アハ、、、、9　アハ、、、、、5　アハ、、、ハ、、、、　アハ、、、、ハ、、、
アハ、、、ヲホ、、、　イヒ、イヒ、、、2　イヒ、、イヒ、、、　イヒ、イヒ、、、、
イヒ、イヒ、イヒヒ、、、、　イヒ、イヒ、、イヒ、、、、、、　ウハ、、、ウハ、、、
ウハ、、、ハ、、、　ヱヘヱヘ、、、　ヱヘ、、、　ヱヘ、、、、　ヲホ、、、14
ヲホ、、、、8　ヲホ、、、、、7　ヲホ、、、、、、2　ヲホ、、、ホ、、、、
ヲホ、、、ホ、、、、、　ハハ　ハツハツハツハ7　ハ、、、13・ハ、ハ、2　ハ、、、、19
ハ、、、、、4　ハ、、、、、、3　ハ、、、、ハ、、、　ハ、、、、ハ、、、、3　ヒ、
ヘ、4　ヘ、、、、5　ヘ、ヘ、ヘ、　ヘ、、、、、　ヘ、、、、、、2
ヘ、、、、ヘ、、、、　ヘ、ン　ホ、、、、

笑い声は、異なり語数で42語、延べ語数で143語であり[8]、擬音語の65％を占めている。「あはは」「いひひ」「うはは」「えへへ」「おほほ」「ははは」「ひひ」「へへ」「ほほほ」のように、現在でも見られるオノマトペのさまざまなパターンが用いられている。42種類の多様な笑い方が人物の個性によって使い分けられていることがわかる。天沼寧（1977）によると『東海道中膝栗毛』には多くの笑い声の擬音語が見られるという。笑い声のオノマトペは滑稽本の特徴の一つといえるかもしれない。

笑い声とも重なるが、セリフには細かい音声が見られる。上記の「ヒ、」「へ、」というちょっとした笑いの描写もそれに当たる。ほかに、「ハツア」「ホウ引」という溜息、「フウ」と息を吐く音、「フツ、フツ」と鼻をひこつかせる音、「フツ、フツ、フツ」と息を吹きかける音、「チヨツ」という舌打ちなどが見られる。登場人物の息遣いがそのままオノマトペで描写されている。以下に例を挙げる。

(7) トやう／＼に籠の手をはなしてひたひのあせをぬぐひ「ホウ引。ヤ、まかつてはゑらいはまりぢや。チヨツ、はづみになつて高い物背負込だはい、あほらしい（四編）
(8)「どなたか洗粉をお遣ひだネ。フツ、フツ、　トはなをひこつかせて（三編）

例（7）には、ほっとした溜息の「ホウ引」や「チヨツ」という舌打ちの音が見られる。例（8）の「フツ、フツ」は、ト書きにあるように鼻をひこつかせているときの音で、現代語では「クンクン」に当たる語である。話し言葉で聞こえてくる音をそのまま写そうとしたことがうかがわれる。

次に、汚い音の描写であるが、げっぷの音が４種類（ゲイツプウ４、ゲイ引、ゲイフウ２、ゲイ引ウツプウ）、延べ数では８語用いられており、ほかに、腹の虫が鳴る音「グイ／＼」もある。浄瑠璃・歌舞伎脚本には見られなかった[9] 卑俗な擬音語が見られるのが特徴である。以下に例を挙げる。

(9)「どうもいへねへゲイツプウ。番頭、ゲイツプウ。ア、酔た／＼。（前編）
(10)「酔たぞ／＼。ゲイフウ。（略）ゲイ引ウツプウ。（四編）

最後に、さまざまな音を口真似する擬音語が見られることを指摘したい。擬音語は実際の音声を写す語なので、セリフの中で用いられる場合は、一般的には先に見た笑い声や溜息、ゲップなど、口や鼻から出る音声を表す例か、もしくは、「是見や罰もねへ者にまでざつぶりと浴せやアがつた。（三編）」「礫を打付たが、岩が脳天へ、ぽかアんと中ツて頭が真二つ（四編）」のように、出来事の描写として擬音語を使った例になる。本作品では、それらに加えて何かの音を口真似として表す擬音語が多く見られる。たとえば、「お嬢さん、ぢつとしてお出、ソリヤぞり／＼／＼（二編）」と、大人が幼児に対して頭を剃る音を口真似

しているような用い方である[10]。三味線や鉦・太鼓の音、馬の嘶き、鉄砲の音など様々な口真似が見られる。以下に例を挙げる。

(11) 鉄砲の見えになり、ねらひすまして　彦「イヨヅドヲン　(四編)
(12) さみせんのわるまね「テコテントン、てこ／＼、てん／＼、つん、ぽんぽん。(前編)
(13)「ぶた七ヤア引豚七ヤア丶イドドドンチヤン／＼　(前編)

例 (11) は鉄砲の音を口真似したもの、例 (12) は、三味線の音を口真似したもの、例 (13) は、新日本古典文学大系本の脚注に「迷子を捜すときに打ち鳴らす鉦や太鼓の音のをまねた」[11] とあるように、鉦・太鼓の口真似である。セリフに様々な音の口真似が見られることが特徴的である。

なお、次の例のような場合、セリフに続いていたのでセリフに含めたが、地の文と同様に考えるほうがよいのかもしれない。

(14) へんじ「ハアイトン／＼／＼／＼／＼／＼／＼　トあし音のまねして風呂の中のはめをたゝき (四編)

先に見たように、「トン／＼」という壁を叩く音は、地の文やト書きでも用いられていた。『浮世風呂』全体に、銭湯独特の擬音語として壁や板を叩いて湯の様子を知らせる音が多用されている。

4.2　セリフに見られる擬態語の特徴

擬態語は異なり語数126語である。このうち、1回だけ用いられているのは86語であり、大多数が様子を伝えるためにその都度用いられた語であることがわかる。複数例見られた40語のうち、3例以上見られたのは以下の18語で、それほど多くはない。

ぐつと 3　ぐる／＼ 3　ざつと 3　さつぱり[12] 9　しつかり 3　じつと (ぢつと) 4
しみ／”＼ 4　ずつと 6　すつぱり 3　そろ／＼ 3　ちやんと 4　ちよいと 9　トツト 4
トント 6　びつくり 3　ひよつと 3　べた／＼ 3　ゆるり 6

上に挙げた語のうち、「とつと」「とんと」「ひよつと」については擬態語と認めるかどうか判断に迷うところである。「ひよつと」は、『日本語オノマトペ辞典』の「ひょっ」の項に掲載されており[13]、「何かのはずみでものごとが起きる」様子の音象徴性が感じられる語でもあり、擬態語とみなした。「とつと」「とんと」は強調表現のように用いられているが、ここでは古語辞典類を参照して擬態語に分類した[14]。

以上のほかに、語形が若干異なるが同様の語に、「いび／＼」2例と「いび／＼いび／＼」1例、「まじ／＼」「まじイり、まじり」「まじイり／＼」各1例がある。

セリフに用いられた擬態語には、物の様子や状態を表す語 (ウナギが「によろヲり／＼」、脂が「ぎら／＼」、布が破れて「ビリ／＼」等) もあるが、3例以上見られた語をはじめ、多くが人物の描写に関わっている。以下、『浮世風呂』のセリフに見られる擬態語の特徴を、①人物の外見、②人物の態度、③話し方、④心情や感覚、⑤その他に分けて見ていく。

①「人物の外見」を表す語には以下のような擬態語が見られた。括弧内には、オノマトペが修飾する語や意味内容を示した。なお、「さつぱり」「すつぱり」など複数例ある語は対象項目に該当する例だけを挙げている (以下同じ)。

ゑご／＼ (太っている)　さつぱり (化粧)　すつぱり (髪や化粧)　すらり (背格好)

ちり／＼（青筋を縐らかす）　てら／＼（顔）　べた／＼３（化粧３）　ほつそりすうわり（柳腰）

ト書きにも人物の外見を表す擬態語が多く見られたが、セリフにもさまざまなオノマトペが見られる。以下に例を挙げる。

(15)「鼠の厚板の帯のこり／＼する九寸幅さ。脊恰好はすらりとして、故人米三を中年増に作つたといふ風だつたが、（三編）
(16)「本面屋ともいひさうに、顔がてら／＼として、誠に本塗だはな。あんまりべた／＼と化粧したのも、助兵衛らしくしつつこくて見ツともないよ。諸事婀娜とか云て薄化粧がさつぱりして能はな。（三編）

例（15）では衣服の様子も交えて人物の姿を描写し、例（16）では顔や化粧の様子を描写している。当時の人々の関心のありどころがうかがえる。

②「人物の態度」を表す擬態語は、人物の動作というより態度や性格がうかがわれる語を拾った。以下の語が見られる。

さつさつ（気味の良い）　じつとり（静かで落ち着いた）　てきぱき（早手回し）
しやア／＼まぢ／＼（平気な様子）　まじ／＼（行く）　まじイり、まじり（している）

(17)「水ぎれの時にも担樋で水をかつがれますが、さつ／＼と気味のよい人でございますネ（三編）
(18)「おそれるほどなら湯も浴せず、小くなつて屈で居べいが、猫糞で、しやア／＼まぢ／＼だ。（三編）

例（17）は、新日本古典文学大系本の脚注に「きびきびとした動作で気持のよい」[15] とあるように、きびきびと動く人柄を描写している。例（18）は、騒いでいる若い女性たちに腹を立てた伝法肌の女性のセリフだが、若い女性たちをかばう番頭に対して知らんふりをしている態度を批判して言っている。

③「話し方」を表す擬態語には以下のような語が見られた。

いび／＼２（小言・泣く）　いび／＼いび／＼（小言）　ぐぢ／＼（言う）
ばかり／＼（無駄口をたたく）　ぶい／＼（地口を言う）　べちやくちや（しやべる）
べつちやくちやべつちやくちや（数え立てる）　べヱら／＼（しやべる）
ぽん／＼ぽん／＼（掛合）　むぐ／＼（口元）

(19)「おらが所の悪婆は、ホンニ／＼いび／＼こごとの本家だらうぞ。（二編）
(20)「何をぐぢ／＼いふのだ。是ほどの子どもの中でおめへ計だ、意地悪根性め（四編）
(21)「口は達者にべヱら／＼しやべつて、人が一言いへば十言程づゝ口答をするが、（二編）
(22)「年老なら年老らしく引込で居りやアいゝのに、若者並にしやべくるからのことさ。（略）口ばかりむぐ／＼したつて歯がたつもんか。（二編）

例（19）～（22）に見るように、小言を言ったりしゃべったりする様子をさまざまなオノマトペで表現している。話し方を表す擬態語が多いことは特徴的と言えるだろう。

④「心情や感覚」を表す擬態語には、以下のような語が見られた。

さつぱり４（快適４）　こざつぱり[16]（着られる）　しみ／”＼４（いやだ２・にくい・憂い）
せか／＼２（息・気持ち）　ぞつと２（恐れ２）　ドツキ／＼（胸）　ねば／＼（脂掌）

のう／＼（のんびり）　ハツ／＼（心配）　びつくり３（驚く３）　ぷん／＼（わきが）
ほつと２（安心２）

「ぞつと」「びつくり」「ほつと」などは浄瑠璃・歌舞伎脚本でも多く見られた[17]が、浄瑠璃脚本には見られなかったその他の語の例をいくつか挙げる。

(23)「最うあがりましよ。今日はこなたが能く流して呉たでさつぱり仕ました。（二編）
(24)「ヲヽ否な事かな。モウ／＼、しみ／“＼いやだ。（二編）
(25)「お夜食を仕舞てから参じますと、気がせか／＼致ますから、（二編）
(26)「いまだに心（むね）がドツキ／＼と云て、腹な虫めがグイ／＼ぬかすはい（四編）
(27)「とつさ゜んがじれ出しなさるだらうと思つて、ハツ／＼として居るに（前編）

例（23）は風呂に入って快適な身体感覚を表し、例（24）は深い心情を、例（25）～（27）は落ち着かない気持ちを表している。本作品のセリフには心情や感覚を表す語が多く見られるが、同時代（江戸後期）の他の作品にも見られるかどうか、今後も調査していきたい。

⑤「その他」として、勢いの良さを表す語と、用例数が最も多かった「ちよいと」を含む素早さを表す語について検討する。

まず、勢いの良さを表す語を以下に挙げる。

グイと（締める）　ぐつと３（つかみかかる・伸ばす・古風だ）
ざつと３（やらかす・一風呂入る・三里もある）　ずいと２（帰る・出ていく）
ずつと６（持つて出る・茶返し・流行・下越後の方まで・おかしく作る・はづむ）

(28)「漸／＼足を引倒して、どさりと転んだ所を、グイと睾丸を締た（四編）
(29)「両手をぐつとのばして、彼宝船をさし上げながらのせり出しさ（四編）
(30)「なるほど宝珠をべつたりと書て、性根玉の歌がごぜへやした。しかしあれは上方の狂歌で、ぐつと古風な体さネ。（四編）
(31)「アイそんならざつとやらかしておくれ。（三編）
(32)「お吊や何角にも道倚なしにずいとお宿へお帰り遊して、（二編）
(33)「あひ着はずつと茶返しの比翼で緋縮緬の襦袢、やつぱり白えりをかけて黒繻子の帯、（三編）
(34)「ざつと一風呂這入べい（四編）

例（28）「グイと」、例（29）「ぐつと」は、実際の動作と強く結びついており、力を込めて行う様子を表しているが、例（30）～（33）は、勢いの良さを加えたり強調したりする働きとなっている。例（34）は、湯をかける「ざつと」の意味も含まれているかもしれないが、例（31）「ざつとやらかす」に通じるような勢いの良さも感じられる用法である。「ぐつと」「ざつと」「ずいと」「ずつと」は、実際の動きの描写というより、勢いのある様子や物事の強調となっており、江戸言葉らしい威勢の良さが感じられる。ほかに、「つウツと最前打てじや。（二編）」の「つウツと」が強調表現と考えられるが、上方者のセリフに１例見られただけであり、上方方言とも考えられる。

これらの他、「トツト４（マア・値切らぬ・わからん・左様ぢや）」「トント６（行方が知れぬ・心に落ちぬ・穏便さ・戯作者の口調だ・絶えてなし・見るやうだ）」もある。「トツト」はすべてカタカナ表記さ

れ、強調表現と見られるが、すべて上方者のセリフである。「トント」は1例だけ「とんと」とひらがな表記されているが、それ以外はカタカナ表記され、勢いをつけるような強調表現として用いられている。「トント行方がしれませぬ」のような打消し表現や「トント戯作者の口調だ」のような比喩表現に用いられる例が多く、慣用的な表現となっている。この二語も、上で見たように、実際の動作の描写というより勢いをつけるための用法となっている。

次に、9例見られた「ちよいと」について見ていく。オノマトペが修飾する語は「踏み外す･湯屋転び･一剃刀・拭く・行く・お辞儀・締める・紅をつける・つつかける」であり、軽快で素早い動作を表す。同様の語に、「さつさ2（出かける・汲み出す）」「ちやつと（はずす）」がある。以下に例を挙げる。

(35)「安座して謔話をしてゐる間には、チヨイト井戸へ行けば、銭いらず鶴瓶からのめます（四編）
(36)「ソコデ、只の立役が目のふちへちよいと紅を付たものさ（四編）
(37)「よび出しの湯を、さつさと汲出されると、湯の湧く間がねへから（四編）
(38)「まだマア酒飲居るさかい、ちやつと外した（四編）

例（35）（36）に見るように、「ちよいと」はカタカナ表記もひらがな表記もあり、軽く何かをする様子を表す。「ちよつと」に近いが、程度だけでなく動きを伴う印象のオノマトペである。例（37）は素早く汲み出す様子、例（38）は素早く席を外す様子を表す。これらは、軽い動き、素早い動きを表している。

5　その他の特徴

5.1　漢語のオノマトペ

本稿では和語のオノマトペを対象として検討したが、近世の作品に漢語系オノマトペがしばしば見られる[18]。たとえば『東海道中膝栗毛』では、「ゆうゆう（悠々）」「しん／＼（森々）」「ふんぷん（芬々）」などのオノマトペが用いられていた。『浮世風呂』では漢語系オノマトペはそれほど多くはなく、地の文には一例もない。ト書きに「べん／＼と」が1例、セリフに「あくせい（齷齪が変化したもの）」「ベヱん／＼」が1例ずつ、「べん／＼」が2例見られた。数は少ないが、「べんべん」というオノマトペが目立つ。以下にセリフの例を挙げる。
(37) 好三昧をぬかしての、夜中までべん／＼と飲居らアな。（三編）
(38) 人を集めておもしろくもねへ芝居ばなしを、ベヱん／＼としてそのあげくは（二編）

例（36）「ベヱん／＼」は「べんべん」を強調した語形なので、セリフには「べんべん」が3例見られることになる。「べんべん（便々）」は大系本の脚注[19]に「だらだらと」とあるように、長々とした様子、何もせず無為に時を過ごす様子を表す。3例ともセリフで用いられており、「べんべん」という漢語が庶民の会話で多く用いられていたことがわかる。今後は滑稽本の他の作品も調査し、当時の庶民の会話に一般的に用いられたかどうかを見ていきたい。

5.2　幼児語

本稿では、名詞化している語はオノマトペとしては取り上げなかったが、『浮世風呂』にはオノマトペ由来の名詞化した幼児語がいくつか見られた。以下に例を挙げる。（　）内に意味を示した。

うな／＼（叱ること）　しい（尿の事）　ぞり／＼（頭髪）　だぶ／＼（湯のこと）
ぽちや／＼（湯を使うこと）

「だぶ／＼」は、「兄さんは手のとゞく所をしめしな。ソリヤだぶ／＼／＼／＼（前編）」のように口真似の擬音語としても用いられているが、「手桶でだぶ／＼を汲で、ソレざア引。（前編）」のように名詞化した幼児語にもなっている。また、「ぞり／＼」は、「今ばゞアが毛虫をぞり／＼と取て（二編）」のように副詞としても用いられているが、「天々をお動かしだとぞり／＼が剃ませんネ（二編）」のように名詞化した幼児語にもなっている。オノマトペが名詞化して幼児語となる例が多いことがうかがわれる。この時代の特徴であるのか、今後同時代の他の作品を調査したい。

このほか、オノマトペではないが、繰り返し語を含む幼児語として、頭を表す「てん／＼」、髪の毛を「めんめ」、かんざしを「かん／＼」、紋を「もんも」、幼児を「ねねさん」、頭を振る様子を「かぶりかぶり」、汚い物を表す「ばゝつちい」などが見られた[20]。

6　まとめ

『浮世風呂』に用いられたオノマトペを、地の文、ト書き、セリフの部分ごとに、擬音語・擬態語に分けて特徴を見てきた。

地の文は擬音語の方が多く、カラスや犬の声、火打ちの音など市中の様子を表す語や、木魚や鈴など人物をイメージさせるための音が少数例見られる。銭湯の場面らしく、「ぎやあ／＼」「がや／＼」など人々が騒ぐ音、合図で壁などを叩く「とん／＼」という擬音語が見られる。擬態語はいずれも銭湯に集まってくる人々を描写している。

ト書きは、擬音語では地の文以上に銭湯の場面らしい音が用いられ、水や湯をかける「ざつぷり」、合図のために羽目板を叩く「トン／＼」、下駄をはく「がた／＼／＼」などが見られる。擬態語は擬音語より種類も数も多く、中でも「ずんぐり」「むぐ／＼」「ひよろ／＼」「よたり／＼」など人物の体格や表情、歩き方といった人物の姿・外見を表す語が多い。また、手拭いの持ち方を表す「すつぽり」「だらり」「ちよいと」など、銭湯に集まる人々の姿をイメージさせるオノマトペも多用されている。心理や性格がうかがえる語に、落ち着かない様子の「うそ／＼」「きよろ／＼」、勢いの良い動作の「ぐつと」「ずつと」、素早い動作の「さつさと」「ひよいと」「ひらり」、密かに動く様子の「こそ／＼」「そつと」、意気消沈する「ぐんにやり」などがある。

セリフは地の文やト書きに比べて作品全体に占める割合が高く、セリフのオノマトペは総数の約八割となっている、擬音語は、延べ語数で擬態語とほぼ同数だが、笑い声のオノマトペが擬音語の65％を占めている。笑い声は異なり語数で42語あり、人物と笑いの場面ごとに臨場感をもって表現されていることがわかる。また、舌打ちや溜息、鼻をひこつかせる音など、人が発するちょっとした音もオノマトペで表されており、会話をそのまま活写しようとしたことがうかがわれる。ゲップなど汚い音も細かく描写している。さらに、三味線や鉦・太鼓の音、馬の嘶き、鉄砲の音などの口真似が多いことも特徴的である。セリフの擬態語は、多用された語は少なく、さまざまな種類のオノマトペが見られた。特徴として、人物の外見（「ゑご／＼」「すらり」など）、人物の態度（「さつ／＼」「じつとり」など）、話し方（「いび／＼」「ぐぢ／＼」など）、心情や感覚を表すオノマトペ（「さつぱり」「しみ／“＼」など）が多く見られた。また、会話の中で勢いをつけるオノマトペ（「ぐつと」「ざつと」など）や素早さを表すオノマトペ（「ちよいと」「さつさ」）もいくつか見られた。

このほか、庶民のセリフに「べん／＼」という漢語系オノマトペが用いられること、オノマトペから派生した幼児語が多いことがわかった。

おわりに

『浮世風呂』のオノマトペから、当時のオノマトペの使用状況を見ることができた。本作品は特に会話部分が多いため、江戸の俗語、会話で多く用いられるオノマトペをまとめることができたのではないかと思われる。今後は、式亭三馬の『浮世床』についても調査し、漢語系オノマトペも含めて当時広く用いられたオノマトペについて整理していきたい。

【注】

1　興津要（1965）は滑稽本の『東海道中膝栗毛』について「前時代にくらべて」「より大衆的で、より全国的な読者を獲得しえた」作品であると解説している。

2　新日本古典文学大系86『浮世風呂・戯場粋言幕の外・大千世界楽屋探』神保五彌校註による。底本は、前編が天理図書館蔵本、二編から四編が早稲田大学図書館蔵本である。

3　たとえば、「とつと」は『古語大辞典』に「はなはだしいことを表す擬態語から」と記述され「①程度のはなはだしいさま。非常に。全く。すっかり。」とあるため、本稿でも擬態語と判断した。ただし、「トトモウ」のように、慣用的な連語となっているものは除外した。その他の語についても、辞典類を参照し、オノマトペの特徴である音の象徴性を鑑みて判断した。

4　オノマトペを擬音語・擬態語に分けて検討するというのは、『東海道中膝栗毛』を分析した天沼寧（1977）に倣ったものである。擬音語か擬態語かの区別がつかないもの、どちらも兼ねているものは、個別に検討してどちらかに分類した。たとえば「あふむけにどつさりころぶ」の「どつさり」は擬態語に分類した。

5　「トン／＼／＼／＼」と「トン／＼トン／＼」という２種類の表記があったが、同じ語とみなした。

6　『江戸時代語辞典』（角川学芸出版、2008年）による。

7　稿末の表では、擬音語のうち笑い声だけを先に列挙した。

8　「ハヽヽヽ」と「ハヽハヽ」は表記が異なるが一語とみなした。

9　拙稿（2020）「近松門左衛門の時代浄瑠璃に見られるオノマトペの特徴―世話浄瑠璃との比較を交えて―」『佐賀大学教育学部研究論文集』第４集第１号から拙稿（2022）「河竹黙阿弥作品のオノマトペ―幕末の歌舞伎脚本を対象に―」『佐賀大学教育学部研究論文集』第６集第２号までの調査による。

10　「ソリヤ」までがセリフで「ぞり／＼／＼」が擬音語とも考えられるが、すぐ後に、そばで見ている子守が口真似をして「ソリヤじより／＼／＼」と言っているので、「ぞり／＼／＼」も「じより／＼／＼」も頭を剃る音の口真似と考えてよいだろう。同様の擬音語として、「兄さんは手のとゞく所をしめしな。ソリヤだぶ／＼／＼／＼（前編）」「手桶でだぶ／＼を汲で、ソレざア引。（前編）」がある。前者の「だぶ／＼／＼／＼」は湯を使う音を幼児に対して父親が口真似したもの、後者の「ざあ引」は、湯を流す音を父親が口真似しながら実際に湯を流したものと判断した。いずれも幼児に対して発した語であり、音の口真似ではないかと思われる。

11　新日本古典文学大系本の34頁の脚注五による。

12　「さつぱり」は、「用がさつぱり片付ません（二編）」のように、打消し語と呼応して「全く」の意味で用いられている例は対象としなかった。

13　p378「ひょっ」の項目②に「何かのはずみでものごとが起きるさま。万一。ひょっとして。」とあり、「ひょっと落たらどうする」という『浮世床』の用例が掲載されている、

14　「とつと」は、注３で述べたように擬態語と判断した。「とんと」は、『角川古語大辞典』に「①擬態語。事のなされるのがすばやいさま。急にすっかりそうなるさま。」とあり「②転じて、事や状態が徹底しているさま。すっかり。まったく。」とある。②の意味は擬態語から転じているが、意味上は「とつと」と同じであり、もとは擬態語であることから、音象徴性が感じられる語として、ここでは二語とも擬態語と判断した。二語とも会話の中で勢いをつけるような用いられ方で、本稿で「⑤その他」の項で触れる「ぐつと」「ざつと」などと同じである。

15　新日本古典文学大系本の166頁の脚注十一による。

16　「こざつぱり」は『日本語オノマトペ辞典』121頁に立項されており、「こ」は接頭語という解説がある。

17　注９の調査による。

18　本稿で扱う漢語系オノマトペは、金田一春彦（1978）が漢語の擬音語・擬態語の型を整理したもののうち、「同じ語根を重ねたもの」「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」とする。

19　新日本古典文学大系本の97頁にある「ベエん／＼」の脚注三一に「べんべんとして。だらだらとして」とある。

20　松村明（1980）にも幼児語特有の語が『浮世風呂』に見られることが指摘されているが、オノマトペについては触れられていない。

【引用・参考文献】

天沼　寧（1977）「『東海道中膝栗毛』に使われている擬音語・擬態語について」『近代語研究』第５集、武蔵野書院
市古貞次・野間光辰他監修（1986）『日本古典文学大辞典』簡約版　岩波書店
穎原胎蔵・尾形仂（2008）『江戸時代語辞典』角川学芸出版
興津要（1965）「滑稽本　東海道中膝栗毛（十返舎一九）」『国文学解釈と鑑賞』30巻６号
小野正弘（2007）『日本語オノマトペ辞典』小学館
金田一春彦（1978）「擬音語・擬態語概説」浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』角川書店
酒井知子（2019）「『浮世風呂』のオノマトペについて」『立教大学日本文学』121号
田中巳榮子（2016）「近世初期俳諧における音象徴語」『國文学』100号（関西大学）
中田祝夫監修（1983）『古語大辞典』小学館
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編（1994）『角川古語大辭典　第四巻』角川書店
芳賀　登（1982）『江戸語の成立』開拓社言語文化叢書
松村　明（1980）「江戸時代後期の国語」国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版、p70～74
山口仲美（2017）「楽器の音を写す擬音語（2）―近世・近現代」『埼玉大学紀要 教養学部』53巻１号
山口仲美編（2003）『暮らしのことば　擬音・擬態語辞典』講談社

付記：本稿は科学研究費基盤研究（Ｃ）（一般）「近世の滑稽本・談義本に見られるオノマトペの記述的研究」（課題番号：22K00589）の研究成果の一部である。

【稿末表】『浮世風呂』のセリフ部分に見られるオノマトペ

（＊括弧内にオノマトペが修飾する語または意味内容をわかりやすく示した。）

＜擬音語＞
アツハツハツハ、、、、、、　アツハ、、、、　アツハ、、、、ハ、、、、　アハ、、、10
アハ、、、、9　アハ、、、、、5　アハ、、、ハ、、、、　アハ、、、、ハ、、、
アハ、、、ヲホ、、、　イヒ、イヒ、、、2　イヒ、、イヒ、、、　イヒ、イヒ、、、、
イヒ、イヒ、イヒヒ、、、、　イヒ、イヒ、、イヒ、、、、、、　ウハ、、、ウハ、、、
ウハ、、、ハ、、、　ヱヘヱヘ、、、　ヱヘ、、、　ヱヘ、、、、　ヲホ、、、14　ヲホ、、、、8
ヲホ、、、、、7　ヲホ、、、、、、2　ヲホ、、、ホ、、、、　ヲホ、、、ホ、、、、、
ハハ　ハツハツハツハ7　ハ、、、13・ハ、ハ、2　ハ、、、、19　ハ、、、、、4
ハ、、、、、、3　ハ、、、、ハ、、、　ハ、、、、ハ、、、、2　ヒ、　ヘ、4　ヘ、、、、5
ヘ、ヘ、ヘ、　ヘ、、、、、　ヘ、、、、、、2　ヘ、、、、ヘ、、、、　ヘ、ン　ホ、、、、
ウ、、（唸り声）　ヱヘン４（咳払い）　ヱヘン／＼４（咳払い）　がり／＼（剃る音）　がんと（なぐる音）　ギヤア／＼（しかる）　グイ／＼（腹の虫）　ゲイツプウ４(げっぷ４)　ゲイ引(げっぷ)　ゲイフウ２(げっぷ２)　ゲイ引ウツプウ（げっぷ）　コロ／＼（鈴を振る）　ざア引（湯を流す音の口真似）　ざつぷり（湯を浴びせる）　じより／＼／＼／＼（頭を剃る音の口真似）　すう／＼（すすり込む音）　ずつしり（地響き）　ぞり／＼（頭を剃る音）　ぞり／＼／＼（頭を剃る音の口真似）　だぶ／＼／＼／＼（湯を使う音の口真似）　チヨツ９（舌打ち９）　ヅドン（鉄砲の音）　ヅドヲン（鉄砲の音の口真似）　テコテントン、てこ／＼、てん／＼、つん、ぽん／＼（三味線の口真似）　ドドドン３（太鼓：歌詞３）　ドドドンチヤン／＼（鉦と太鼓の口真似）　とヲんと（落ちる）　どんと（羽目を叩く）　トン／＼２（叩く２）　トン／＼／＼／＼／＼／＼／＼（叩く）　トン／＼／＼／＼トトン（叩く）　トン／＼トトントン（叩く）　どん／＼どん（太鼓の口真似）　ハツア（溜息）　ぴしやり（将棋を指す）　ヒヒンヒン／＼（嘶きのまね）　ピヨイ（唾をはく）　フウ（息を吐く）　ぶく／＼／＼／＼２・ぶく／＼ぶく／＼（湯に入る様の口真似３）　フツ、フツ（はなをひこつかす）　フツ、フツ、フツ（息を吹きかける音）　ヘツ、ヘツ３(吐き出す３)　ホウ引（溜息）　ぽかアん（岩が脳天に当たる音）　ぽきイり（向う脛を叩きくじく）　ポキリポキリ（氷を切る）　ポン／＼（拍手）　わア／＼（騒ぐ）　わアい／＼２

＜擬態語＞

あべこべ２（身持ち・親子）　いび／＼２（小言・泣く）　いび／＼いび／＼（小言）　うか／＼（する）　うんすん２（うなる・言う）　ゑご／＼（する＝太っている）　がた／＼（震える）　ぎう／＼（いわせる）　ギツクリ２（にらむ・決める）　ぎつしり（蓋する）　きと（うける）　ぎら／＼（する＝油）　きり／＼（汲め）　ギリ／＼２（歯を噛む・いっぱい）　グイと（締める）　ぐぢ／＼（言う）　ぐつと３（つかみかかる・両手を伸ばす・古風だ）　ぐる／＼３（回る・転がす・巻く）　こざつぱり（着られる）　ごし／＼（顔のつまみ洗い）　ごつちや（にする）　こり／＼（する＝帯の厚板の様子）　ころり２（させる＝だます・する）　さつさ２（出かける・汲み出す）　さつさつ２（気味の良い・着殺す）　ざつと３（やらかす・一風呂入る・三里もある）　さつぱり９（する６・音信不通・無疵・やめる）　さら／＼（茶漬けを食べる）　しげ／＼（見られる）　しつかり３（気・溜まる・詰める）　しつくり２（いかない・継ぎ合わす）　じつと２・ぢつと２（する４）　じつとり（とした女子）　しみ／”＼４（いやだ２・にくい・憂い）　しやア／＼まぢ／＼（平気な様子）　しやつきり２（する２）　じよろり／＼（草履をだらしなく履く）　ずいと２（帰る・出ていく）　ずう／＼（昼寝）　すウつくり（立つ）　すきと（ない）　ずつと６（持って出る・茶返し・流行・下越後の方まで・おかしく作る・はづむ）　ずつしり（ぬける＝稼ぐ）　すつぱり３（やる・する＝髪や化粧・きまる）　すつぺり（元の通り）　すら／＼（治る）　すらり（背格好）　ずる／＼／＼（辷り出す）　ずんど２（痛みもない・気立ての良い）　せか／＼２（息＝苦しい・気が～する）　ぞつと２（する２）　そろ／＼３（違ってきた・流す・さする）　だらり／＼（湯をくむ）　たんまり（湯に入る）　ちやつと（はずす）　ちやんと４（したくする・落ちてある・だます・しめる）　ちよいと９（踏み外す・湯屋転び・一剃刀・拭く・行く・お辞儀・締める・紅をつける・つっかける）　ちよろ／＼（走ってくる）　ちよんぼり（いけてある）　ちらと（見そめる）　ちらほら（まねる）　ちり／＼（青筋を縐らかす）　ついと２（出ている・商いじゃ）　つウツと（最前）　てきぱき（早手回し）　てら／＼（顔）　てんと（面白し）　どうど（床に着く）　どさり（転ぶ）　ドツキ／＼（胸が～いう）　トツト４（マア・値切らぬ・わからん・左様ぢゃ）　どつぴ／＼（騒ぐ）　どろ／＼２（海苔が混じる・する＝表面）　トント６（行方が知れぬ・心に落ちぬ・穏便さ・戯作者の口調だ・絶えてなし・見るようだ）　どんぶり（温まる＝湯につかる）　によろヲり／＼（ウナギ）　ぬる／＼ぬる／＼（ウナギが指の股から出る）　ねば／＼（する＝脂掌）　のう／＼（する＝のんびり）　のさ／＼（踏んで歩く）　のろり（帰る）　ばかり／＼（無駄口をたたく）　ぱくり／＼（煙草をのむ）　ばた／＼／＼／＼（どたばたの言葉遊び）　はつきり（する）　ハツ／＼（している＝心配）　ぱつぱと２（減らす・使う）　パラリ（売れてしまう）　びつくり３（する３）　ぴたり２（駒をつける２）　ひよこ／＼（おどる）　ひよつと３（～たら２・交って）　ぴら／＼（裾から腰巻が見える）　ビリ／＼（破れている）　ぴん／＼２（はねる２）　ふい／＼（風任せ）　ぶい／＼２（地口を言う・勇む）　ぷツつり（おっしゃらない）　ふと（したこと）　ぶら／＼２（する＝ぶらぶら病・行く）　ぶり／＼（鰹）　ぶる／＼ぶる／＼（震える）　ぷん／＼（わきが）　べた／＼３（なする・化粧する・つける（白粉））　べちやくちや（しゃべる）　べつたり（書く）　べつちゃくちゃべつちゃくちゃ（数え立てる）　べろり（舌を出す）　ベヱら／＼（しゃべる）　ぽち／＼／＼（斑がある）　ほつそりすうわり（柳腰）　ほつと２（する２）　ぽつぽと（湯気の立つ）　ほや／＼（降りたて）　ぽん／＼ぽん／＼（掛合）　ぽんやり（する＝見えにくい）　まじ／＼（行く）　まじイり、まじり（している）　まじイり／＼（見る）　むぐ／＼（口）　むしやり／＼（餅を食う様子）　むつくり２（起きる２）　むり／＼（かみ砕く）　むりゝ／＼（こはだを頭から食う）　ゆる／＼（遊ぶ＝豆腐が茶碗の中で）　ゆるり６（おゆるり（と）３・流す・お出なさい・御覧なさい）